

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 ( 学 術 )	氏名	李 賢正	
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当			
論 文 題 目 日本語と韓国語における新語の対照研究：混種語における外来要素を中心に				
論文審査担当者				
主 査	広島大学大学院国際協力研究科	准教授	深見兼孝	印
審査委員	広島大学大学院国際協力研究科	教授	佐藤暢治	
審査委員	広島大学大学院国際協力研究科	教授	黒田則博	
審査委員	広島大学大学院文学研究科	教授	今田良信	
審査委員	広島大学	名誉教授	多和田眞一郎	
〔論文審査の要旨〕				
<p>本論文は、日本語と韓国語における新語形成における外来要素の特徴を、特に混種語に焦点をあてて論じたものである。</p> <p>論文は7章からなっている。第1章では序論として研究の背景、範囲、目的等を、第2章では先行研究と本研究の意義を、第3章では調査の概要を述べている。続く第4章では語種の観点から新語と語種全般を比較し、新語では、混種語の割合が日本語でも韓国語でも最も高くなっている一方で、固有語は韓国語の方が、外来語は日本語の方が割合が高くなっているとしている。第5章と第6章では考察の対象を新語中の混種語に焦点を絞っている。第5章では造語成分の語種およびその組み合わせについて、日本語でも韓国語でも、外来要素と漢語要素の組み合わせが最も多く、語の初めに最もよく見られることなどの共通点がある一方で、外来要素と固有要素の組み合わせは、韓国語の方でよく見られるとしている。第6章では外来要素の頻度および出現位置などを実例とともに論じ、日本語でも韓国語でも、混種語の造語成分としての外来要素のほとんどは既に定着しているものであるが、それ自体新語とみなされる要素は最初の造語成分として用いられる傾向が強く、韓国語の方がそのような要素が多いとしている。第7章では結論として論文全体をまとめ、日本語と韓国語の新語の外来要素に見られる差異は、両言語の外来要素の定着度の違いを反映していることを示唆し、当面は外来要素を使った新語がこれからも作られて行くだろうと展望している。</p> <p>本論文は、用語の定義や記述の仕方に若干の問題がみとめられるものの、新語という名称のもと、21世紀に入って使用されだしたと思われる語を対象にし、その中で外来要素の振る舞いについて日本語と韓国語の対照を行っているという点で、関連の先行研究にない独創性が見られ、高く評価できる。また、本論文に関して2本の論文が公刊されている。</p> <p>以上のことから、審査委員会では本論文が博士論文（学術）の水準に十分達していると判断し、全員一致で合格とした。</p>				

